

ロマンティックを独り占め

Yorika & Ryo

桜木小鳥

Kotori Sakuragi

termity



エタニティ文庫

目次

ロマンティックを独り占め	5
愛しの君に花束を	151
秘密の恋はバラ色に	281

ロマンティックを独り占め

春風の君へ

季節はもう秋です。

時折吹いてくる風も、だんだん冷たくなってきました。

でも、あなたのそばで吹く風は、いつも春のように暖かです。

まるで春の陽だまりのようなその笑顔。

どれほどまわりを癒しているか、あなたは知っていますか？

あなたが微笑むたび、わたしの心はメリーゴーランドのようになると――

……ん？ 心はくるくるとは回らないか？

ずっと握り締めていたペンを置き、書きかけのレポーター用紙を持って、改めて最初から読み返してみる。

——うーん、ちよつと違う気がしてきたぞ。でも、メリーゴーランドって言葉は可愛いから捨てがたい……

悩んだ末、レポーター用紙を一枚破り、くしゃくしゃにまるめて後ろに放り投げた。そこには同じようにまるまった紙くずがいくつも散乱しているはずだ。

一人暮らしの良いところは、いくら部屋を散らかしても誰にも怒られないってこと。自分の限界が来たら片付ければいいのだ。まあ、さすがに生ゴミだけはちゃんと捨てるけれど。

レポーター用紙に向き直り、またペンを持つ。

レポーターなんだから、もつと直接的な言葉が良いのだろうけど……。でもそれはちよつと恥ずかしいんだよね。それに「好きです」、「付き合ってください」、「だけじゃちよつと物足りない。それじゃあ他のたくさん女の子と変わらないもの。わたしだけの特別な気持ちを表さなきゃ、このご時世にわざわざ手紙を書いて渡す意味がない。」

目を閉じて、あの人の顔を思い出す。春の陽だまりのような優しい笑顔。

わたしの、わたしだけの春風の君。

今、わたし、当麻依子とうまよりこが頭をひねりながらレポーターを書いている相手は、同じ会社の竹下春樹たけしたはるきさん。四つ年上で、広報部に所属している。

わたしがその人を好きになったのは少し前のことだ。以前から気にはなっていた。端で優しげな顔立ち。すらりとした立ち姿。いつも柔和に微笑んでいて、名前の通り春のような人。周りにはいつもたくさん女の子たちがいて、まるでアイドルを追いかけるファンのように彼を取り囲んでいる。

素敵な人がいるんだなど、最初はそれだけだった。どこの会社にも一人はいる、アイドル的存在。見ているだけで満足で、それ以上は望まない。本当にただそれだけだったのに。

でも、あの瞬間、わたしの気持ちは変わったのだ。

それは数ヶ月前の夏の暑い日だった。茹だるような暑さの中、直属の上司であるにくき市ノ瀬先輩にお使いを頼まれて外出したわたしは、ふらふらになりながら、よくよく会社にたどり着いた。そしてエレベーターを待っていると、首筋にひんやりと冷たい何かが当たって、思わず声を上げて飛び上がった。

「あ、ごめん。冷たすぎたかな？」

驚いて振り返るとそこに竹下さんがいた。にっこりと微笑んだまま、手にはペットボトルを持っている。

「あんまりにも暑そうだから、冷やしてあげようかと思って」

照れたように言い訳をするその人を見て、わたしの心臓はありえないほど大きく動

いた。

「暑い中ご苦労様」

そう言いながら冷たいペットボトルをわたしの手に押しつけて、彼は去っていった。

その後ろ姿が見えなくなるまで、まばたきをすることすら忘れていた。

頬が熱かった。それが暑さのせいなのか、さっきまで目の前にいた、まるで王子様のような人のせいなのか、それすら判断できない。ただ一つ確実にわかったのは、その瞬間、自分が恋に落ちたということ。

これまで生きてきた二十五年間で、できた彼氏はたった一人だ。大学時代にちょっとだけ付き合った人だけど、その彼氏にだってこんなときめいたことはない。なんて単純な人間なんだろうとは思う。こんな些細なことで、アイドル並みの人気者を好きになっ

てしまっただなんて。でもそれ以来、わたしの生活は竹下さん一色になった。寝ても覚めても彼のが頭から離れず、彼の顔見たさに毎朝玄関ロビーで彼を取り巻いているファンに交ざった。

悔しいことに彼のファンの間ではわたしは新参者なので、初代メンバー（なんだそりゃ）より前には行けないのだ。はっきり言って背も低めなので、輪の一番後ろでぴよんぴよん飛び跳ねるしかなく、顔がちよっと見えればラッキーぐらいの感覚だ。

彼の周りはいつもそんな風なので、本人にはほとんど近づけない。あの夏の日、彼が

偶然一人であそこにいたことは、今思えば奇跡のような一瞬だったのだ。あの時に告白しておけば良かった。まあ、好きになった直後に告白なんて、できるわけがないけど。それなら、せめて同じ部署だったら良かったのに……わたしは営業、彼は広報。

ああ、竹下さん、竹下さん、どうしてあなたは広報なの？ いったんもしかめっ面のにつききり市ノ瀬先輩よりも、何倍も何十倍も営業向きのお顔なのに。

だから、わたしは決意した。今のままファンクラブ（？）の中にもいても、なんの進展も期待できない。周りでキヤーキヤー言ってる、集団の一人で終わりにたくない。その中から一步踏み出すためには何をしたら良い？ 彼の印象に残るような何か。色々考えて、そして一つの結論に達した。つまり、ラブレターを渡すこと。

メールが主流の今の世の中、少しでもインパクトを与えるためには、手紙は有効な手段だと思った。幸いなことに文章を書くのは好きだ。小学校の時に書いた詩は、朝礼で校長先生から褒められたくらいだもん。

そう思い立って数日。家に帰って時間が許す限り手紙の文面を考えているけど、これがまあ、あまり上手くいかない。要は「好きです」って伝えるだけなんだけど、やっぱりそれだけじゃつまらない。他とは違う、特別な想いを知ってほしい。でも、それを言葉に表すのはとても難しい。

ここ数日で書き捨てた紙を集めたら、薄い詩集が一冊くらいできるんじゃないかしら。

内容はちよつと……だけど。それはそれで、後で読み返したら楽しいかもしれない。

そんなことを考えながら、またレポート用紙に向かい、新しいページを開いた。

2

吹きつける風の冷たさに、わたしは思わず肩を凍めた。駅の周りには大きなビルが立ち並んでいるから、ビル風が強い。最近朝が徐々に寒くなっていたのに、この風のせいで余計に肌寒く感じる。そのせいではないけれど、わたしは会社に向かう足を次第に速め、最後の数十メートルはほぼ駆け足をしていた。

いつもより一本遅い電車に乗ってしまったって、朝から走るようになってしまった。だいたい、どうして家の鍵を決まったところに置かないのか、自分のうかつさを呪ってしまふ。おかげで鍵を探しまくって、朝の貴重な時間を無駄にってしまった。おまけに鍵は昨日脱いだ服の中に入っていたという始末……

一人暮らしを始めてから、同じようなことが何度あっただろう。それを聞いて呆れた隣人から鍵を入れるための可愛いケースをもらい、玄関の靴箱の上に置いていたのだけれど、その中に入れること自体忘れてしまうのだ。

もうちょっとちゃんとしようよ、わたし。心の中で自らを叱り、会社のビルに駆け込んだ。

中の暖かさにホッとした瞬間、女の子たちの悲鳴にも似たどよめきが聞こえた。良かった、間に合った。急いであまり広くないロビーの片隅にできた、女の子たちの集団に近寄る。すでに何重にもなった輪の中心にはあの人がいるはずだ。そう、わたしの春風の君。

竹下さんは毎日同じ時刻、就業開始よりも少し早めに出勤するので、ファンの女の子たちはその時間に合わせて出社している。もちろん、わたしも同じだ。まあ、今日は遅れちゃったけど。

輪の一番外側で、今日もびよんぴよん跳ねながら、時折ちらっと見える、茶色がかつた柔らかなキレイな髪にときめく。

いつものことだけど、竹下さんは一人ではなく、同僚の荻野さんと一緒のようだ。

荻野さんは竹下さんと同じ広報部の人で、彼に負けず劣らず男前だった。竹下さんに比べると、荻野さんの方が少しクールで男っぽい。正反対な感じの二人だけども仲間が良くて、一緒に見かけることも多い。男前二人が揃っているの、周りの女の子のテンションも余計に上がる。だから毎回こんな騒ぎになるようだ。

何度目のジャンプで、ようやくお顔がちらっと見えた。もうちょっとヒールの高い

靴を履いてくるべきだろうか。五センチのヒールじゃ限界がある。でも、これ以上高いと外回りが辛いし……

「抱き上げてやるのか？ 当麻」

突然、耳元で低い声がして、驚きのあまり思いっきり飛び上がってしまった。ようやくお顔全体が見えた！ と一瞬喜んだけれど、着地と同時に振り返ると、蔑むような笑みを浮かべた市ノ瀬先輩がいるものだから、一気にテンションが下がった。

「せ、先輩。……お、おはようございます」

「はい、おはよう。ほら、行くぞ」

相変わらずの愛想のなさで、集団の横をさっさと通り過ぎていく市ノ瀬先輩を慌てて追いかける。

この集団をものともせず、ずんずんと歩いている人は市ノ瀬稜といい、同じ営業部で、わたしの直属の上司だ。年齢は五歳上の三十歳。長身だし顔もすごく良いんだけど、愛想はないし、いつも仏頂面が不機嫌そうな顔しかしないから、竹下さんたちほどの人気はない。まったくくない。全然ないっ。しかもイジワルで、わたしのことを奴隷だとも思っているのか、いっつもこき使う。竹下さんの柔らかそうな茶色の髪と比べ、市ノ瀬先輩のは真っ黒で硬そうで、まさしく天使と悪魔だ。

それなのに一部では、クールで素敵と思われているらしいし、どうやら彼女もいるよ

うだ。世の中には物好きがいるものだ。

ま、彼のおかげで今日は朝から竹下さんの素敵なお顔を拝見できたのだから、よしとしよう。怪我の功名というやつだ。今日は良いことがあるかも。

自分の席に着いて、ウキウキと仕事を始めようとしたら、また背後でからかうような声が出た。

「もう少し背が高ければ良かったな？ 当麻」

もうっ、ムツカつく〜っ。

見えないようにこぶしを作り、心の中で先輩を思いつきり罵った。

自宅の狭いユニットバスにお湯を張り、できる限りからだを伸ばす。ああ、今日も足が棒のようになってしまった。まったく、外回りは辛い。しかも、市ノ瀬先輩ったら歩くのが速すぎる。もうちょっと気を使ってくれば良いのに……なんてさりげなくそう言ったら、

「ああ、悪い。当麻の方が足が短かったな」

なんて言うのよ！ そこを突っ込む!? 違うでしょ、女の子だからでしょ!?

だから市ノ瀬先輩は嫌いだ。できることなら関わりたくないけど、そうもいかない。

今は市ノ瀬先輩について得意先を回り、営業の仕事を教わっている最中なのだ。

それに……何より見逃せないのは、市ノ瀬先輩と竹下さんはどうやらお友達らしいってこと。時々だけど、二人で話しているのを見かける。何度か先輩に話しかけるふりをして近寄ろうとしたけれど、いつも他の人に先を越されるのだ。だから、次の機会には絶対竹下さんとお近づきになれるよう、できるだけ我慢して先輩にくっついている。

あーあ、恋って試練の連続なのね。むくんだ足をさすり、膝を曲げてお湯の中からだを沈めた。

お風呂上りに冷たい水を一杯飲む。パジャマを着て、バスタオルを頭にのせたまま、部屋の真ん中にあるテーブル代わりのコタツに座った。天板の上に置きっぱなしにしてあるレポート用紙とペンを手元に引き寄せる。

明日はお休みだから、今夜は遅くまで書けそうだ。そろそろ真面目に考えてまとめていかないと、とは思いますが、その一方で時間がかかっても、読んだ瞬間に自分の想いの全てが伝わるような、素敵な手紙にしたいと思う。

実際に渡すならどこが良いだろう。会社だとちよつとロマンティックさに欠けるよね。それに、邪魔がいっぱい入りそうだし。例えば海の見える丘とか、夜景のキレイな高台の公園とか……

キラキラした何かを背景に彼は立っている。あの優しげな顔で、もじもじしてるわたしを励ますように笑いかける。

『あ、あの……』
震える手で手紙を渡そうとするけど、どうしてもできないわたし。それを察した彼が、手を伸ばして、手紙を持っているわたしの手首をそっと掴んで持ち上げる。

『君のこの手紙の中には、どんな素敵な言葉が入っているの？』

そう言いながら、わたしの指先にキスを……

「いやーんっっ！」

自分の妄想に思わず悲鳴を上げた。そのままボタンと背中から倒れ、ごろごろと床を転がる。

ありえるっ。ありえるわっっ。そして、竹下さんはそんなシチュエーションが許される人なのよっっ。

足をバタバタさせていると、突然ピンポンと玄関のチャイムが鳴った。

ヤバイ、うるさかったかな？ 慌てて立ち上がり、ドアのそばにあるインターホンを取った。

「は、はい」

『うるさいよ、依子』

「り、里都ねえ？ ちょっと待って」

頭に絡まったバスタオルを外し、手ぐしで短い髪を整えながら玄関のドアを開けると、

隣の部屋に住んでいる、わたしの良き隣人、青柳里都あおやぎが立っていた。

「夜中に暴れないの。何事かと思うでしょ？」

「ご、ごめんさーい」

里都ねえはニヤツと笑うとコンビニの袋を掲げたかか。

「花の金曜日なのに、一人寂しい君にお土産を買ってきたぞ」

「……里都ねえだって同じじゃん」

部屋に入る里都ねえが通りやすいように壁に寄って、そう呟く。

「わたしはたままたまなのよ」

里都ねえはそう言いながら、コタツの上に袋を置いた。

わたしがこの部屋に引越してきた時から、里都ねえは何かと面倒を見てくれている。たった三つしか離れていないのに、彼女はものすごくしつかり者だ。しょっちゅう鍵を探すわたしを見かねて、誕生日プレゼントに可愛い鍵入れを贈ってくれたのも里都ねえだった。

「あら、仕事中心？」

里都ねえの声に我に返る。見ると、コタツの上に缶チューハイやらおつまみを並べていたらしい彼女が、レポート用紙を手にしていた。

「ううん、ラブレターを書くかと思って」

わたしがそう言うのと、里都ねえはビタリと動きを止め、それからゆっくりと振り返った。

「……ラブレター？」

「うん。ほら、言わなかった？ 好きな人ができたって」

里都ねえの向かい側に座り、袋の中からお菓子を出すのを手伝った。

「聞いてるわよ。竹なんとかさんだっけ？ すごくカッコいい人なんでしょ？」

「そう。竹下さん。いっつも周りにファンの女の子がたくさんいるの」

レポート用紙を天板の端に寄せ、里都ねえから受け取った缶チューハイで乾杯してから一口飲んだ。うーん、やっぱり風呂上がりにはこっちな。

「どうしてラブレターなの？」

もう一口飲むかと思ったところで里都ねえが聞いた。缶を置いて、うーんと首を傾げてみる。

「どうしてって？ それは、特別なことをしたいと思ったから、だろるか。」

「奇をてらってみようかと思って。インパクトがあるでしょ？ ラブレターって」

「……まあ、ねえ。ちょっと見ていい？」

「うん」

里都ねえが置いてあったレポート用紙を取り上げ、ページをめくった。

「……わたしの心はメリーゴーランド？ ……なんの歌詞よ？」

「ラブレターだっけば」

わたしがそう言うと、里都ねえが小さくむせた。

「……も、もうちょっと普通の言葉の方が良いんじゃない？」

「でも、それじゃあ味気ないでしょ？」

「……伝わることの方が大事じゃないかな？」

「素敵な言葉で表したいの。……でも、どうしてもポエムっぽくなっちゃうんだよねえ」

また一口チューハイを飲み、里都ねえが買ってきてくれたスナック菓子の袋を開けた。

「あんだ、学生の時、文芸部とかだった？」

「ん？ 違うよ、バレーボール部」

「……なるほど。……ここにもドリーマーがいたか。そういえば名前も似てたわ」

「何？」

「ん？ いやまあ、会社に似たような人がいるのよ。その人は読んで想像する系なんだけどさ。あんたは書く系のねえ」

スナック菓子を頬張っているわたしを見て、里都ねえがしみじみと言った。

「何よ、書く系って」

「色んなタイプがあるんだなってことよ。勉強になるわ。さ、気を取り直して飲む」

里都ねえはレポート用紙を床に置き、わたしに新しい缶を押しつけた。

なんだかスッキリしないけど、促されるままにチューハイをぐいっと飲んだら、ちよつと気分が良くなってきた。さきイカやらチョコレートやらを食べつつ、二本目のチューハイを空けたら、さらにふわふわと気持ち良くなってきた。そのせいか、急に頭の中に素敵な言葉と映像が溢れてくる。

「里都ねえ！　こういうのはどう？」

「は？」

「あなたを見かけるたびに、妖精の羽に落とした雨の雫しずくのように、わたしの心は震えるのです」

何だか歌うように言葉が出てきたぞ。満足して里都ねえを見ると、彼女はぼかんと口を開けていた。

「……………ファンタジーもありなんだ」

「えっ？」

「いや、うーん。まあ、ちよつとわかり辛いんじゃない？」

「そうかなあ」

「素直に好きですって書けば良いじゃない」

呆れたような里都ねえにひらひらと手を振る。

「やあだあ。そんなストレートに書いたら恥ずかしいでしょお」

「……………妖精の羽の方がよっぽど…………」

ぶつぶつ言う里都ねえの声を聞いていると、また頭の中に言葉が浮かんだ。

「じゃあこれは？」

「……………まだあんの？」

「冷たい吹雪の中で出会った、暖かなかまくらのような——」

「もういいって」

里都ねえが手を振って遮かざった。

「ええーっ。これからのに——」

中途半端なところで切られたので、頭の中の吹雪がふつと消えてしまった。せつかく思いついたんだからもちたいたい。そう思い、床に置かれたレポート用紙を取って、さっきの言葉を書きつける。妖精の羽って可愛いじゃない。ペガサスの翼っていうのも良いかも。

せつせとメモっていたわたしに、また里都ねえの声がかかる。

「それより、あなたの先輩の話をしよ」

里都ねえが言ってるのは市ノ瀬先輩のことだ。前に先輩の愚痴を言ったら、やけに先輩のことが気に入ったみたいで、それ以来何かと話を聞きたがる。頭の中に急に市ノ瀬先輩のイジワルな顔が浮かんで、妖精もペガサスもかまくらもどこかに行ってしまった。

「……えー、市ノ瀬先輩の話なんてどうでも良いよ。今週もイジワルでした。それだけだもん」

里都ねえに今朝の嫌味な会話を話したら、
「ふーん。なるほどね」

と、いつもの何を考えているのかよくわからない顔で言った。その顔を見ながら、里都ねえと市ノ瀬先輩ってちょっと似てるなあなんて思ってしまう。先輩もあの仏頂面ぶつちようづらのせいで何考えてんだかわからないだよね。

その後も金曜日の深夜番組を見ながら、里都ねえと楽しくおしゃべりをして、散々飲み食いした。0時を回った頃にようやく片付けを始めると、ゴミをまとめていた里都ねえが、部屋のゴミ箱いっぱい紙くずも大きいゴミ袋にまとめてくれた。

「依子、ノートパソコン持ってるでしょ？」

「うん」

小さなキッチンで洗い物をしながら返事をする。

「手紙の推敲すいこうはそっちでやれば？ 書き直すのも楽よ。ゴミも出ないし。今の時代はエコよ」

「あ、そっか」

パソコンはネットしかしてなかったけど、そういう使い方もできるよねえ。

「うん、じゃあ次からそうしてみる」

部屋が片付くと、里都ねえが大きく伸びをした。

「あーあ、もう寝よ」

玄関まで一緒に行き、扉を開ける。

「じゃあね、おやすみ」

「おやすみなさい。ご馳走様ちそうさまでした」

ひらひらと手を振る里都ねえに声をかけ、扉を閉める。しばらくして隣の部屋の扉が開く音が聞こえた。

まだお酒が残っているから、足元がふらふらする。でもからだはぼかぼかしていて、気分が良い。

残念ながら手紙は進まなかったけれど、いくつか素敵な言葉を思いついたのでよしとしよう。

そしてこの土日は里都ねえに言われたようにパソコンでやってみよう。そうだよね。いちいち書き損じて紙を破くこともないし。

眠い目をこすりながら部屋の電気を消し、ベッドにもぐり込む。枕に顔を押しつけると同時に、睡魔が襲ってきて、わたしはあっという間に眠ってしまった。

出社早々、わたしは営業部の自分の席に座り足をさすった。今日も朝からジャンプをしたせいで足が痛い。でもまあ、また竹下さんの見目麗しいお顔を見られたから満足だ。今朝も素敵だったなあ……。この汚れた世界の中で、神々しいまでの透明感……—
 ん、今の言葉も良いんじゃない？

慌てて鞆かばんの中の携帯電話を探す。もたもたしながらメモ画面を出し、ぼちぼちとボタンを押した。こうごうしい、透明感……と。

里都ねえのアイディアのおかげで自宅のゴミの量は激減した。ノートパソコンのテキストファイルの数だけは膨大になってしまったけれど、データのサイズ的には大したことはない。

問題は移動中や会社の中だったりする。この頃は暇さえあれば文面を考えているので、こうやって家の外で思い浮かんだ時はちよつと困る。忘れないように携帯にメモをするのだけれど、元々メールを打つのも速くないので、もたもたしているうちに忘れてしまうのだ。それは非常にもつたいない。

メモ帳でも持ち歩くなかなあ……。やっぱり携帯で打つより速いし。でも、そしたらまたゴミが増えるだろうか。この前エコを意識したばかりなのになあ……

何かないかと椅子に座ったまま社内をぐるりと見回すと、コピー機のそばにある箱が目に入った。それはミスコピーや書き損じた書類を入れる箱だ。

これだ！ と思い立ち、その箱から数十枚の紙を取ってきた。散らかった机の上にスペースをあげ、裏が白いことを確認してから、二、三枚ずつ半分に折って、それを定規で切った。

ふふふ、ナイスなアイディアじゃない？ これならエコだし、良いよね。束にしてからダブルクリップで留めれば、即席のメモ帳になるじゃない。

社外秘の書類が紛れていないか、一応表側も確認しながら、鼻歌交じりにテンポ良く折って切っていると、背後で人の気配がした。振り向くより前に、低い声が頭の上から降ってくる。

「当麻、何遊んでるんだ？」

顔を上げると、案の定、市ノ瀬先輩が冷ややかな顔でわたしを見下ろしていた。

「遊んでません。エコですよ、エコ」

わたしがそう言っ、ミスコピーで作ったメモ用紙を見せると、先輩は半ば呆れたような表情を浮かべた。

「……またどっかで覚えてきやがったな」

「失礼な。前から知ってますって」

少し頬を膨らませて反論すると、バカにしたように鼻を鳴らされる。まったくもう、ムカつく男だ。

「もうすぐ出るぞ」

市ノ瀬先輩はそう言うときさささと自分の席に着き、外回りの準備を始めた。

「えっ、あ、はいっ」

わたしも慌てて立ち上がり、机の上から必要な書類とミスコピーの束を取って鞆かばんに突っ込む。そしてさささと部屋を出ていく市ノ瀬先輩の後を必死で追いかけた。

「待ってくださいよー」

エレベーターホールでようやく立ち止まった先輩は、小走りで駆け寄るわたしを呆れたような顔で見ている。

「転ぶなよ」

「転びませんっ——」

そう言った瞬間、足首がぐきゅつとなった。やっぱり転ぶかもと思ったけれど、次の瞬間市ノ瀬先輩がわたしの腕を持って支えてくれていた。

「落ちて着け」

「あっ、ありがとうございます」

エレベーターの扉が開くと同時に、先輩の手が離れた。彼の後について乗り込み、その背後に立つ。自分がそっかしいことは自覚しているけど、やっぱり気まずい。この靴が悪いのかしら。ジャンプもできないし……。そう思いながら足首をぐりぐりと回しているとき、先輩が振り返った。

「痛めたか？」

「えっ？ いえ。全然平気です」

慌てて手を振ってそう答える。市ノ瀬先輩は眉間にちよつとしわを寄せると、また前を向いた。

まったく、先輩はイジワルなんだか親切なんだかわからない。まあ総じて無愛想なんだけど。なんだろ、このギャップが一部マニアに受けるんだろうか。わたしから言わせてもらえば、イジワルな人なんてダメだと思う。好きな人にはいつでも優しくしてほしいもの。

頭の中に穏やかに微笑む竹下さんの顔が浮かぶ。自然と込み上げてくる笑みを堪こらえ、先輩の後に続いてエレベーターを降りた。

地下鉄に乗り込み、数駅先で降りたところで先輩が口を開いた。

「今から行くところは機種替えを考えているんだ。俺たちの仕事は、一番価格の高い最新型を売り込み、さらに他の機械も替えてもらうことだ」

「はい」

うちの会社のメイン業務はOA機器や業務用機材のリースと販売だ。ニーズに合わせてパソコンからコピー機、電話機、果ては文房具や書類棚までなんでも揃える。いかに顧客を増やすかは営業の腕に掛かっているのだ。無愛想な市ノ瀬先輩に、営業は向いてないんじゃないかと思っていたけれど、意外にも先輩の成績はトップクラスだったりする。

「新製品のパンフレットと仕様書を渡して……」

歩きながら話していた先輩の足が突然ビタリと止まった。

「どうしました?」

「まずい、価格の変更表を忘れた」

「ええっ」

「最後にコピーをして、その後の記憶がない。ったく。FAXしてもらおうか……」

先輩が鞆かばんから携帯を取り出すのを見た時、ふと何かが頭の中を横切った。あれは確か……

わたしは自分の鞆の中を探って目的のものを見つける。

「あの、これじゃないですか? 半分に切っちゃいましたけど……」

耳に携帯電話を当てていた先輩の前で、ミスコピーで作ったメモ用紙の束の中からそれらしき紙を数枚抜いてひらひらと振った。それを見て驚いた先輩が携帯を下ろす。

「それだ。どうして?」

「ミスコピーの箱の中から取ってきたんですよ。間違って入れちゃったんですかね?」

「……お前の突飛な行動も、役に立つことがあるんだな」

その言い方に若干むくれると、先輩がわたしの頭をぽんと軽く叩いた。

「とにかく助かった。行くぞ」

市ノ瀬先輩は近くのコンビニに駆け込み、セロテープを購入した。場所を借りて半分になった紙をテープで貼り合わせ、一度コピーをしてから、持っていた修正液で繋ぎ目を消したり、少し消えてしまった文字を書き足したりして、ほぼ原物と変わらないものを作り出した。

「……器用だなあ」

出来上がった書類をコピーしながら、こっそりつぶやく。わたしもこれから鞆の中にセロテープとか修正液とかはさみとか入れておこう。何があるかわからないもんね。

その後、何事もなかったように時間通りに顧客先に入った。市ノ瀬先輩が先方に最新式の製品の説明をするかたわら、わたしはパンフレットを広げたり、書類を出したり、

時々先輩が振ってくるちよつと難しい仕様説明に辛うじて答えたりしていた。結果、無事に最新機のリース契約までこぎつけ、おまけに事務机十台とパーティーションの契約までとることができた。

毎回不思議なんだけど、市ノ瀬先輩の話し方って説得力があるんだよね。いつも無愛想でとつつきにくいのに、ちゃんと契約が取れるんだもん。わたしも同じようにできるのか、ちよつと不安だ。

今は一緒に回っているけれど、その内これを一人でやらないといけない。わたしは人見知りではない性質だから、そういう意味での緊張はないが、それだけで契約が取れるわけもない。今はそのノウハウを学ぶために、先輩についてあちこち回っているのだけど、見て覚えるつてとても難しい。

全てを終えてビルから出ると、珍しく市ノ瀬先輩がホッと息をついた。

「良かったですねえ」

「……そうだな。なんだ、その顔は？」

おっと、顔に出ちゃったかしら？

「別にい……。でも誰のおかげでしょうねえ」

わざとらしくそう言ったら、先輩が苦笑いした。

「当麻のおかげだよ。……よし、ご褒美にお前の言うことをなんでも一つ聞いてやるよ」

「えっ!？」

驚いて思わず立ち止まると、先輩も足を止めた。

「願いを言えよ、当麻」

見上げた市ノ瀬先輩の顔がすごく意味深に見えて、ちよつとだけキドキした。

「いっつもイジワルばかりの先輩に、一つでも『命令』できるなんて……どうしよう、何にしよう。あ、『命令』じゃなくて、『お願い』か。

ランチやちよつと値の張るディナーをご馳走してください、とかいうのは、ちよつと違うと思う。もういちいち嫌味を言わないでくださいとか、一回殴らせてくださいとかも違うかな。今わたしが一番望んでいることはなんだったらう。

その時、頭の中に春の陽だまりのような笑顔が浮かんだ。

ああ、そうだった。わたしはそれを望んでいたんだ。

「竹下さんとお近づきになりたいんです。協力してください！」

「……は？」

わたしが勢い込んで言ったので、市ノ瀬先輩が一步後ずさりながら面食らったような顔をした。

以前ペットボトルをもらったけど、あれは近づいたとは言えない。それどころか彼が私のことを覚えているかどうかとも怪しい。

「だから、竹下春樹さんですって。広報の。先輩とお友達でしょ？」

「……友達じゃない」

「でも、時々お話されてるじゃないですか！」

「……まあ」

「ちょこつとで良いんです。一回で。一回紹介してもらえればそれで良いんですっ」

わたしの熱意に押されたのか、先輩が微妙な表情を浮かべ、渋々といった様子で頷いた。「やったー！」

先輩はびよんびよん飛び跳ねるわたしを冷やかな目で見ながら、

「朝もそれだけ飛べれば良いのにな」

と言うと、一人でさっさと歩き出した。いつもならカチンとくるセリフだけど、目の前の未来が限りなく明るく見え始めたわたしには、まったく気にならなかった。

いつも通り残業になってしまったけれど、仕事が終わった後も気分は上々だ。満員電車もなんのその。浮かれ気分で駅の改札を抜けると、後ろから誰かにぼんと肩を叩かれた。

なんだ？ と振り返るとそこに里都ねえが立っていた。

「おかえり。遅くまで大変だねえ」

「里都ねえこそお疲れ様」

「一緒に帰ろ。でもその前にコンビニに寄って」

「いいよ」

彼女と並んですぐ近くのコンビニに向かいながら、ホッと息をつく。わたしたちが住むアパートまでは駅から歩いて十分ちよつとあるので、やっぱり夜に一人で歩くのは心許ないのだ。

コンビニでパッツと買い物をして、二人並んで歩きながら、今日のことを考えていた。今日は本当に良いことだらけだった。仕事もまあバッチリだし、なんとと言っても市ノ瀬先輩と約束したんだもん。もしかしたら、明日の朝には、早速竹下さんがわたしだけに微笑んでくれるかもしれない。一度でも接点ができれば、後はなんとかなると思う。「なんかいいことでもあったの？」

「えっ？」

隣を見ると、里都ねえが少し呆れたような顔で、わたしの顔を指さした。

「ニヤニヤしてる」

ああ、幸せって顔に出してしまうのね。

「えへへ。実はね……」

込み上げてくる笑いを堪え切れないうまま、今日あったことを里都ねえに話した。「これで少しはお近づきになれるよね！」

あまりの期待感に思わず声が大きくなってしまったわたしを、里都ねえが意味深な顔をして見た。

「なるほどね……。ま、上手くいけばいいけど」

その言い方が何かを含んでいるように聞こえたけれど、舞い上がっているわたしにはそれも気にならなかった。

4

市ノ瀬先輩と約束してから数日が経つけれど、わたしは相変わらず女の子の輪の一番外側を跳んでいた。

ああもうっ、今日は髪の毛しか見えないじゃない。内心イライラしながら、それでも頑張って飛び跳ねていると、すぐそばで、

「この前のジャンプ力はどうした？」

というイジワルな声が聞こえた。パッと振り返ると、そこにはやっぱりいつもの冷めたような笑みを浮かべた市ノ瀬先輩がいた。思わずその腕を掴んで、女の子の群れから離れる。

「おっと。朝から大胆だな？ 当麻」

からかいを含んだ声にジロツと睨み返し、ロビーの端まで来てから腕を離れた。

「約束はどうしたんですか!? 約束は！」

詰め寄るわたしを市ノ瀬先輩が面白そうな顔で見下ろしている。そしてとぼけたように言った。

「約束って？」

「もうっ。たっ……竹下さんのことです」

名前の部分だけを小声でささやく。

「ああ」

急につまらなそうな顔になった先輩に、わたしはさらにムカついた。

「……もしかして、忘れてました？」

「……」

先輩はふいと顔を逸らすと、そのまま無言で歩き出した。

「酷いっ。約束したのにな」

わたしが叫ぶようにそう言うと、先輩はさらに歩くスピードを上げ、ちようど来たエレベーターに乗り込んだ。慌てて後を追いかけたけれど、わずかの差で扉が閉まり、わたしだけその場に残されてしまった。

ム、ムカつくつ。地団駄じだんだを踏みながら次のエレベーターに乗って営業部に入ると、市ノ瀬先輩は、

「さあ、仕事仕事」

と言いながら、わざとらしく書類の束をめくり始めていた。

く、悔しい。この数日、わたしの心がどれだけ期待に溢れていたか……

ギリギリと奥歯をかみ締め、自分の机の上に鞆かばんを放るように置いた。

お昼前までデスクワークをして、その後いつものように市ノ瀬先輩と外回りに出かけることになった。顧客先の近くのファストフード店に入り、向かい合ってお昼ご飯を食べるのも、まあよくあることなのだけど、朝のことが糸を引いているわたしは、まだふくれっ面のままだった。

「……そう怒るなよ」

ハンバーガーにかぶりついたまま、ふと目を上げると、市ノ瀬先輩が困ったような顔をしてわたしを見ていた。さすがに反省したんだろうか。口が塞がっているため返事ができないでいると、先輩がコーヒーを一口飲んで、頬杖をついた。

「……何がきっかけだったんだ？」

「……へ？」

「竹下だよ」

「……どうしてですか？」

「……と呑み込んでから口を開く。」

「……ある程度は情報がないと、協力もできないだろ？」

そういうものなの？ でも、ようやくやる気になってくれたようなので、ここは素直に言うことを聞くべきだろうか。

「えつとですねえ……」

言葉を探しているうちに、あの暑い夏の日の思い出が一気に甦よみがえってきた。

ギラギラ照りつける太陽、その熱さとは正反對の、ペットボトルの冷たさ。それから、あのとろけるような笑顔。世界中の時間が止まった、わたしが恋に落ちた瞬間。気がついた時にはわたしはそのことを熱く語っていた。

「……そんなことですか？」

うつとりと余韻ひびに浸るわたしの耳に、市ノ瀬先輩の呆れた声が届き、バラ色の世界が一瞬で消える。もうっ、いい気分だったのにつ。

「それだけで十分なんです！」

言い返したわたしを、先輩はすごく胡散うさんくさそうな目で見た。

「いいじゃないですかっ。好きになるきっかけなんて、大抵些細なものなんですから」

市ノ瀬先輩は肩を竦めて、今度は自分もハンバーガーにかぶりついた。しばらくの間ほぼ無言になる。あらかた食べ終わった後、一息ついた先輩がまた口を開いた。

「お前の希望はあるのか？」

「え？」

「どんな風に協力すれば良いんだ？」

やっぱりやる気になってくれたようだ。嬉しくなって、思わず前のめりになる。

「そうですね……」

頭の中に竹下さんを思い浮かべる。ここまでお預けされたんだから、ただ紹介してもらうだけでは物足りない気がしてきた。

どんな風にすれば、自分に関心を持ってもらえるだろうか。まずはわたしの存在を強く意識してもらうことが大事だけ……。何かインパクトのある出来事があれば――

「例えば、先輩が急にお腹が痛くなったりするんです」

「……は？」

「それで、わたしがどうしたんですかって介抱しているところへ、竹下さんが通りかかると……」

「…………で？」

「で、ああ彼女はなんて優しい女の子なんだって思ってもらえるじゃないですか？」

「……なんだその小芝居は？俺は時代劇に出てくる町娘か!？」

珍しく声を荒らげる先輩がちよっと面白い。

「じゃあ、タイミング良く階段から落ちそうになったわたしを竹下さんが受け止めてくれる……とか？」

少女漫画とかによくあるパターンだけど、結構ドラマティックで良いじゃない。

「……どうやってタイミング良く落ちるんだよ」

「それは先輩が偶然を装って突き落とすければ――」

「俺を犯罪者にする気か！ お前おかしいぞ！」

先輩がゾツとしたように叫び、後ろに仰け反った。

「そんな怖い感じじゃないですよ。その時のわたしは、背中にまるで羽が生えたように、ふわりと竹下さんの腕の中に落ちていくんですから……」

ああ、なんてロマンティックなの。

思わずうっとりとしたわたしの前で、市ノ瀬先輩が驚愕の表情を浮かべていた。

「……まあ、冗談ですよ、冗談」

あまりに驚かれたのでへらへらと笑って手を振ると、今度はおかしなものを見るような目で見られた。気を取り直して、姿勢を直す。

「本当に冗談ですって。最終的には手紙を渡したいんです。そのきっかけが欲しいんで

すよ。今のままじゃ、近づくことさえできないから」

「……手紙？」

「ラブレターです」

思わずキャットとつぶやき、両手で熱くなった頬を隠した。そつと顔を上げると、先輩がすごく奇妙な顔をしてわたしを見ていた。

「……ラブレター？」

「はい。最近毎晩書いてはいるんですけど、良いフリーズが見つからなくて……」

「単刀直入に書けば良いだけだろ？」

「なんだか里都ねえと同じこと言うんだなあ。」

「それじゃあ味気ないじゃないですか」

反論すると、また胡散くさそうな表情で先輩が眉を上げた。

「……例えば？」

その言葉に、鞆かばんの中からミスコピー用紙で作ったメモ帳を取り出した。

「なんだそれは？」

「思いついた言葉を書き留めてるんです。携帯に打つより速いから」

「……そのための紙だったのか……」

その声がちょっとがっかりしているように聞こえたけれど、構わずにメモ帳をめ

くった。

「えっと、この前思いついて気に入ったのが……この汚れた世界であなたはまるでた一つの奇跡。——どうですか？」

期待を込めて先輩を見ると、なんだか変な顔をしている。

「……どうですかって……それはなんかの歌詞か？」

「ラブレターですってば」

わたしがそう言うと、先輩がまた微妙な顔になった。

「本気か？」

「至極」

わたしが頷くと、

「……ちよつと貸せ」

そう言って、わたしの手からメモ帳をひったくった。

「えーっ、返してくださいよお」

わたしの手をかわし、先輩がメモを一枚めくる。

「……わたしの心はメリーゴーランド。あなたから吹く穏やかな風に吹かれてくるくると回ります……？ 風を起こすなんてアイツは超能力者か!? それにメリーゴーランドを回す風が穏やかなはずないだろ!? それじゃあ台風だ」

こゝろ

渾身の一節なのにつ。文句を言う前に、またページがめくられた。

「月明かりを見上げ、夜空の星の中にあなたを探します……。今度は死んでるじゃないか!?」

そうかしら？

「春の陽だまりのようなあなたのそばで、妖精が舞うような……。——もう人間から離れてきてるぞ」

「もうっ、返してください」

いちいち文句をつける先輩の手からようやくメモ帳を奪い返し、鞆かぼんの中にしまった。そしてキッと睨んでやると、先輩が真剣な顔でわたしを見ていた。

「当麻、一つだけアドバイスをしてやる。それはラブレターとは言わん」

「もう、だから今考え中なんですってばっ」

「もっと根本から考え直せ！」

「何を書いても良いじゃないですか。もう、先輩はとにかくきつかけを作ってくれれば良いんですっ。約束でしょ？」

先輩が疲れたようにため息を一つついた。

「……どうしてたかだか手紙を渡すのに小芝居がいるんだ？」

「だからあれは冗談ですっ。ちよっと紹介してくれるだけで良いんです」

まあ本心を言えばちよっとやってみたかったけれど……。へへっと笑うと、先輩がもう一度ため息をついて立ち上がった。

「……行くぞ」

「あ、待ってくださいってば」

慌てて最後のポテトを口に入れ、飲み物で流し込む。そして鞆を肩にかけてトレイを持つと、急いで先輩の後を追った。

外回りを終えて会社に戻ってきた頃には、足が棒のようになっていた。エレベーターの中で、こっそりと靴を脱いで足をブラブラと振ってみると、一瞬にして血の巡りが良くなる。

ふと隣に立つ市ノ瀬先輩をこっそりと見上げる。ほぼ一日一緒に行動していたのに、先輩は相変わらず涼しい顔をしている。元々先輩は無愛想で何を考えているのかよくわからないけど、今日のお昼は珍しく表情が豊かだった。とは言っても、わたしをバカにしながらのものだったので、驚く以前に腹立たしいけれど。

エレベーターから降りて廊下を歩いていると、偶然にも前から竹下さんが荻野さんと一緒に歩いてくるのが見えた。うわっ、ラッキー！

「あ、ほら先輩！今ですよ、今！声をかけてくださいっ」

市ノ瀬先輩の背中をつんつんとつつき、小声でせつついた。

「……いや、今はやめておけ」

「ええーっ、どうしてですか？ チャンスなのに！」

言葉通り、先輩は声をかけることなく無言のまま二人とすれ違った。すれ違い様、竹下さんがべこつと頭を下げてくれたので、わたしも大袈裟なくらいに頭を下げた。荻野さんもちらつとこつちを見てくれたけれど、市ノ瀬先輩はどちらも無視した。

先輩の背中を睨んでから、名残惜しさに振り返ると、数人の女の子たちが彼らを取り囲むのが見えた。

「あーあ、やっぱりさっきのがチャンスだったのに……酷い」

「まあ、そのうちにな」

素っ気無いその言い方に、またカチンと来る。

「もうっ。協力してくれる気があるんですか？」

「……一応は、ある」

一応って何よ!? わたしが文句を言う前に、先輩は歩くスピードを上げ、さっさと営業部に入っていた。

逃げやがったな。朝と同じ展開に、思わずまた地団駄じだんだを踏んだ。

仕事を終えて、くたくたになって家にたどり着いた頃にはすっかり夜も遅くなっていた。

アパートを見上げると、里都ねえの部屋に電気が点いているのが見える。誰かに愚痴りたくて仕方がなかったわたしは、自分の部屋に入る前に里都ねえの部屋のインターホンを鳴らしていた。

「どうしたの？」

「ちよつと、聞いてっ！」

部屋着姿の里都ねえは、勢い込んでそう言ったわたしを部屋に上げ、

「まあ、落ち着きなさいよ」

と、温かいお茶を入れてくれた。うずうずしながらスーツを着たままコタツに足を突っ込み、里都ねえが座るのを待つ。

「もう、市ノ瀬先輩ったら酷いんだよ！」

「だからどうしたのよ」

今朝からの流れを話すと、最初は真剣に聞いてくれた里都ねえだけど、ラブレターの文面を散々けなされたあたりでゲラゲラと笑い出した。

「笑いごとじゃないよ」

「ごめんごめん」

そう言いながらもお腹を抱えてまだ笑っている。

「あーあ。なんだ、先輩ってまともな人なんじゃない」

ようやく落ち着いた里都ねえが、涙を拭いながら言った。

「ちがーうっ」

叫ぶわたしをまあまあとなだめる。

「だって、その後だって、会社で竹下さんと偶然会ったのに、話しかけてもくれなかったんだよ。あの約束はなんだったのかと言いたい！」

「……ふーん」

里都ねえはそう言っつて、熱いお茶を一口飲んだ。

「要は、依子が手紙を渡す時に協力してもらえば良いんでしょ？」

「まあ、それはそうなんだけど……できれば渡す前にもうちよっとお近づきになりましたかったんだもん」

「大胆なんだか、奥ゆかしいのか、わかんない子だねえ」

ちよっと呆れたように里都ねえが笑った。

「だって、久しぶりなんだもん」

「何が？」

「恋をするのが」

「……ほほう」

だって、本当にそうなんだもん。

初恋は小学生の頃だった。相手はクラスで一番かけっこの速い男の子。運動会で誰よりも大きく声を上げ、選抜リレーでトップを走る彼を応援した。ちなみに中学を卒業するまでその子にずっと片想いをしていた。

二回目に好きになった男の子は、高校の生徒会長だ。朝礼や委員会で発言する彼をウキウキしながら眺めた。

その男の子たちとそれからどうなったかと言うと、どうにもなっていない。応援するだけで終わり、ウキウキするだけで終わった。今思えば、それらは「恋」と言えるかどうかとも怪しい。でも大抵の女の子ってそういうもんだと思う。事実、クラスの約半分の女子は彼らに憧れていた。ちゃんと恋愛をするのはもっと大人になってからだ。

初めて彼氏ができたのは大学生の時で、向こうからの告白で付き合うことになった。

嬉しくって舞い上がって、ただ楽しくて。でも楽しかったのはわたしだけだったみたいで、あつという間に振られて終わった。理由はよくわからない。最後の頃に、君って結構がちがちやしてるんだね」と言われたのは覚えていられるけれど。

がちがちや」というのが、がさつ」という意味であれば、まあ当たっている。片付けベタだし、落ち着きがないって言われるし。それで振られてしまったのだとしたら悲

しいけれど、こればかりは性格だからどうしようもない。

特別シヨックだったわけでもないけど、以来、なんとなく好きな人もできなかった。でもそれが悪いこととは思わない。恋愛だけが全てじゃない。仕事は楽しいし、友達や里都ねえと遊ぶのも楽しいもの。

今回、久しぶりに恋をして、自分でも舞い上がっている感は否定できない。でも久しぶりだからこそ完璧でありたい。子供の頃みたいにただ見ているだけじゃなく、最初の彼氏の時のようにただ受身じゃなく、自分が思うままにしてみたい。だからこそ、苦手な市ノ瀬先輩にもお願いしているんだから。それで振られてしまっても、きつと後悔はしないだろうと思う。

「……早く手紙書きちゃおう」

コタツの天板に頬をのせてそうつぶやく。

「ま、頑張んなさい」

里都ねえがわたしの頭に手を置いた。その手がとても温かくて、なんだか涙が出そうになった。

5

それからまた数日、先輩もわたしも思ったより忙しくなってしまったせいも、竹下さんとはなんの進展もなかった。それでも、毎朝欠かさず女の子たちに交ざってジャンプをし続けていることは言うまでもない。

ほぼわたしの一言メモと化したミスコピーのメモ帳は、枚数だけがどんどん増えている。自分で書きたためておきながら、ちよつとうんざりしてきた。

フリーズばかり考えてても仕方がないし……そろそろ本格的にやろう。本番に向けてレターセットでも買ってこようかな。もつとやる気が出るかもしれないし、ちよつと週末だし。

そう決意した日、偶然にも定時に仕事が終わった。会社の外にいたけれど、そのまま直帰しても良いとのことだったので、駅の向こうにある大きな文房具屋に行くことにした。

一緒にいた市ノ瀬先輩にそれを告げると、なんと一緒に行くと言いだした。

仕事の後まで先輩と一緒になんて……とは思うものの、男の人の視点で選んでもらうの